

「コミュニケーション」という問題を考えるとき、私は2つのことを思い出す。ひとつは、大学時代、専門の語学のクラスで、自分の考えを正確に伝えようとして言葉を駆使したにもかかわらず、教師の解釈で簡単に言い換えられ、言いようのない情けなさを感じたことである。そして、もう一つは、現在3歳の息子がまだ言葉というものを知らなかったとき、不満や怒りなどの激しい感情を周囲にうまく伝えられず、大声で泣きじゃくったり、物を投げたりして、困り果てたことである。

このようなときにいつも私が感じたのは、人が人に自分の思考を正確に伝えようとする根源的な欲求の深さである。それは、日本語教師として教室で学習者と対峙するときにも直面させられ、解決を迫られる問題でもある。日本語教師の仕事は、学習者が自分の思考を思ったとおりに表現できるように支援することであると言っても過言ではないだろう。

では、日本語教師として、学習者の欲求にどのように向かい、支援していけばいいのか。「総合」の授業は、語彙や文型といった言語要素の運用力のみならず、学習者のコミュニケーション能力そのものの育成を志向しているという点で、まさにその問いに応える授業であるといえよう。今回の座談会で、「総合」は、コミュニケーション能力を育むための、日本語教師版みたいなもの」といった意見が出たが、これは、筆者が「総合」に参加して抱いた「日本語の授業としての一線を越えている」という感覚を裏付けるものである。

筆者の印象だが、日本語教育の現場では、思考と言語は、学習者があらかじめ母語で思考した内容を学習者のレベルに合った日本語に置き換える、または、日本語の語彙や文型を学習した後に、その運用練習として自分の思考を表現するというふうに、やや分離して扱われることが多いように思う。しかし、「総合」の授業では、学習者の思考が日本語を媒体としてそのまま紡ぎだされることが期待される。日本語は、あくまでも思考を表現する手段であって、目的ではない。目的は自分の思考を伝達することであり、さらに言えば、思考を伝達することによって、意識的にせよ、無意識的にせよ、聞き手の意識を変容させ、それによって自分もまた変容することである。「総合」の目的は、コミュニケーションそのものの目的であるといえよう。

今回の座談会を終えて、鮮明に感じたのは、コミュニケーション能力の育成という観点から見た場合の「総合」の授業の普遍性である。「総合」とは、日本語教育における一つの考え方であって、具体的な指導方法を表すものではない」といった意見や、「学習者中心」とは異なる「学習者主体」といった考え方についての意見なども、このような「総合」の本質を表す意義深い話だったと思う。

そして、何より印象的だったのは、担当者それぞれが、自分なりの「総合」について試行錯誤しながら、教室環境づくりを行い、教室活動を実践していることだった。試行錯誤の末に作り出された教室環境を学習者に提供し、そこで行なわれた学習者とのやりとりを踏まえて、さらによりよい環境づくりを実践していくという担当者の姿勢は、コミュニケーションを実現させることによって、コミュニケーション主体相互の意識を変容させていくという「総合」の根本的な考え方を体現しているように感じられた。

「総合」の授業における教師、学習者、教室環境のあり方は、試行錯誤の過程で変容していくものだけに、個性性が強く、確固としたものとして捉えにくいように思われる。しかし、座談会では、思考し、変容していく過程、または、そこに現れる諸要素の関係性そのものに重要な意味があるのだということを認識させられた。日本語教師としては、解答のない大きな課題を背負わされたようで、荷が重い、習慣化、固定化されがちな日々の授業について、深く考える機会を与えてくださった報告書・座談会関係者の方々に厚く御礼を申し上げたい。

座談会の感想 信森あづさ

座談会の冒頭で、「ざっくばらんに、疑問に思っていることや気になることを率直に、執筆者に語ることが目的です」と言われ、文字通り、言いたい放題、聞きたい放題に、さまざまな話をさせていただいた。そのことを通して私が「総合活動型日本語教育」について考えたことをまとめる。